

スポーツ庁委託事業 令和4年度 感動する大学スポーツ総合支援事業

「学生アスリートのデュアルキャリア支援の促進に関する調査研究」 に関する調査報告書



一般社団法人
大学スポーツ協会

＜2＞学生アスリートのデュアルキャリア支援の促進に関する 調査報告書

1. はじめに

本報告書は大学の運動部に在籍経験のある社会人に対して、大学の運動部活動を通じて伸ばした資質や獲得した能力を明らかにすることを目的とした。

対象は令和4年（2022年）時において25～40歳の全国の男女である。その理由として、本対象者は1982年～1997年の生まれとなり、1980年度学習指導要領改訂以降に小中学校で教育を受けた、いわゆる「ゆとり世代」に位置するからである。「ゆとり世代」の是非をここで問うものではない。そこで、今後のわが国の中心となる世代の実態を調査すべく、本調査の対象とした。

以下に詳細に述べるが、1) 卒業大学群との関係性、2) 大学での競技成績、3) 運動部内での位置づけ（試合出場状態、学生スタッフ）による差異を抽出して実態把握をすることとした。

2. 調査方法

2-1. 調査目的

大学運動部の学生が部活動を通じて伸ばした資質や獲得した能力が、現在の自分にどのように活用されているかを振り返り、大学の運動部活動を通じて伸ばした資質や獲得した能力を明らかにするための調査を実施する。

2-2. 調査手法

インターネットによる定量調査

2-3. 調査実施期間

2022年12月20日(火)～2022年12月21日(水)

2-4. 調査対象者

- 1) 全国の25～40歳の男女
- 2) 4年生大学または大学院卒業者
- 3) 大学時代に運動系の部活動に所属した経験を持ち、卒業時まで活動をしていた者

2-5. サンプル数

1,108 サンプル

2-6. 調査項目

1) スクリーニング調査

7問（上記 2-4. に該当する対象を限定した）

2) 属性（活動形態含んだ 3 項目）

(1) 出身大学

調査対象者の出身大学を入試難易度にて以下に分類した（n=サンプル数）。

A) 国立大学グループ（431）、B) 私立関東圏難関大学グループ（70）、C) 私立関東圏準難関大学グループ（77）、D) 私立関西圏難関大学グループ（66）、E) 私立関東圏中位大学 1 グループ（35）、F) 私立関東圏中位 2 グループ（66）、G) 私立関西圏中位グループ（62）、H) 私立関東圏理系大学グループ（16）、I) A~H よりも難易度が低い大学グループ（225）、J) その他（15）、K) わからない（45）。

(2) 所属運動部の大会での最終成績

回答者の大学時代の運動部活動における大会の最終成績を以下に分類した（n=サンプル数）。

A) 地方大会まで（726）、B) 全日本学生選手権（インカレ）出場（197）、
C) 全日本学生選手権（インカレ）出場、上位進出（85）、D) 世界大会出場（17）
E) 世界大会に出場し、4 位以内（18）、F) その他（65）。

(3) 大会での試合出場状況

回答者の大学時代の運動部活動における大会での試合出場状況を以下に分類した（n=サンプル数）。

A) レギュラー（593）、B) 準レギュラー（139）、C) サブメンバー（145）、
D) メンバー（119）、E) 学生スタッフ（マネジャー・主務・学連等含む）（83）、
F) その他（29）

3) 【調査項目】 大学時代の運動部活動の状況

以下の 4 群-13 項目の質問を行った。

(1) 部活動と学業の両立

< Q3-1 > 「両立意識」、< Q3-2 > 「部活動と学業以外の犠牲」、
< Q3-4 > 「両立のコツ」、< Q3-5 > 「キャリアの明確化」、< Q3-6 > 「補完性」、
< Q3-7 > 「明確な目標設定」、< Q3-10 > 「能力の客観的分析」

(2) 関係構築

< Q3-8 > 「良好な関係構築」、< Q3-9 > 「相談相手」

(3) 挫折経験と両立ストレスの対処

<Q3-11> 「挫折経験」、<Q3-12> 「両立ストレスの対処」

(4) 就職意識

<Q3-3> 「就職優位性」、<Q3-13> 「選択肢の拡大」

4) 【調査項目】 大学時代の運動部活動によって獲得したと思われるキャリアに関するコンピテンシー

以下の 8 群（能力）－20 項目の質問を行った。

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| (1) 感情のコントロール・ストレス耐性 | <Q8-1> <Q8-4> <Q8-7> <Q8-11> |
| (2) 自己肯定感 | <Q8-2> <Q8-14> <Q8-18> <Q8-19> |
| (3) 分析・批判的視点 | <Q8-3> <Q8-5> <Q8-10> |
| (4) 計画性 | <Q8-6> <Q8-8> <Q8-9> |
| (5) 学習意欲 | <Q8-12> |
| (6) 対人関係・交渉能力 | <Q8-13> <Q8-15> <Q8-20> |
| (7) レジリエンス能力 | <Q8-16> |
| (8) 財務管理能力 | <Q8-17> |

2-7. 調査実施機関

株式会社アイディエーション

3. 【結果と分析】大学時代の運動部活動の状況

3-1. 回答者全体（調査結果＜表 1＞）

回答者全体において高いポイントを示したのは、1) 「部活動と学業との両立」においては＜Q3-1>「両立意識」70.1、＜Q3-10>「能力の客観的分析」59.9であった。

2) 「関係構築」においては＜Q3-9>「相談相手」68.8、＜Q3-8>「良好な関係構築」68.1であった。

3) 「挫折経験と両立ストレスの対処」においては＜Q3-11>「挫折経験」が66.8と高かった。一方で＜Q3-13>「両立ストレスの対処」が49.8と半数以上の回答者がうまく対応できていなかった。

4) 「就職意識」においては＜Q3-3>「就職優位性」が37と低く、卒業後への意識が希薄であった。

学生時代に部活動や大学での人間関係の構築には高いポイントがみられたものの、就職意識、すなわち卒業後への意識は薄かった。さらに、1) 「部活動と学業との両立」は＜Q3-1>「両立意識」のような抽象的な質問項目においては高いポイントを示したが、＜Q3-4>「両立のコツ」、＜Q3-5>「進路の明確化」、＜Q3-7>「明確な目標設定」などにおいて半数以下が低いポイントを示した。これらから、学生時代において半数以上の回答者が「部活動と学業の両立」を意識していたことを示しながら、実態として「目標を設定」し、明確に到達したかどうかを回答したのではない。そのため、「部活動と学業の両立意識」が高かったと言える。

3-2. 出身大学別（調査結果＜表 1＞）

1) 部活動と学業の両立について：＜Q3-1,2,4,5,6,7,10＞

以下に特徴的なものを示す。

A) 国立大学グループは回答者全体よりも同群 6 項目において高いポイントであったが、＜Q-7>「明確な目標設定」に関して僅差であり、総じて回答者全体のポイントを超えている。傾向としては上記 1. 回答者全体と同様であった。

B) 私立関東圏難関大学グループは同群 7 項目全てにおいて回答者全体よりかなり高いポイントを示すだけでなく、4/7 項目において最も高かった。特徴的なのは＜Q3-4>「両立のコツ」、＜Q3-5>「キャリアの明確化」、＜Q3-7>「明確な目標設定」において、全体よりも約 10 ポイント以上 (9.7~19.4) の高さであった。

C) 私立関東圏準難関大学グループは＜Q3-10>「能力の客観的分析」において最も高い 72.7 であった。＜Q3-1>「両立意識」に関して回答者全体のポイントをやや下回るものの、その他の項目では上回っており、上記 1. 「回答者全体」と同様の傾向であった。

D) 私立関西圏難関大学グループは＜Q3-10>「能力の客観的分析」において低いポイント (53.0；全体 59.9) であったが、＜Q3-6>「補完性」において 68.2、＜Q3-2>「部活

動と学業以外の犠牲」では 63.6 と最も高かった。<Q3-4>「両立のコツ」、<Q3-5>「キャリアの明確化」、<Q3-7>「明確な目標設定」も A)グループに次いで高かった

E) 私立関東圏中位大学 1 グループの特徴は<Q3-10>「能力の客観的分析」が 48.5 と全ての大学グループの中で最も低くかった。

G) 私立関西圏中位グループの特徴は<Q3-10>「能力の客観的分析」が 66.1 と C グループに次いで高いが、<Q3-6>「補完性」においては 51.6 と低く、特に<Q3-4>「両立のコツ」、<Q3-5>「キャリアの明確化」、<Q3-7>「明確な目標設定」においては回答者全体を下回っていた。

総体的に「部活動と学業の両立」については回答者全体と同様であった。しかしながら<Q3-4>「両立のコツ」、<Q3-5>「キャリアの明確化」、<Q3-7>「明確な目標設定」に低さがみられた。n=16 とサンプル数は少ないものの、H) 私立関東圏理系大学グループ (16) は<Q3-1>「両立意識」で 75.0、<Q3-4>「両立のコツ」でも 68.3 と全グループの中で最も高かった。

出身大学別には「部活動と学業の両立の意識」はあるが、「明確な目標設定」や「到達目標」などが無いまま運動部活動を行っていたという実態であった。さらに、国立大学よりも私立大学の方が「部活動と学業の両立」の意識が高かった。その中で、全体的に入試難易度と「部活動と学業の両立」には相関がみられた。

2) 関係構築：<Q3-8,9>

各グループとも高いポイントを示した。しかしながら C) 私立関東圏準難関大学グループにおいて<Q3-8>「良好な関係構築」、<Q3-9>「相談相手」とともに 58.4 とサンプル数の少なかった H) 私立関東圏理系大学グループを除いて最も低くかった。

総体的に大学時代の状況として運動部活動や学業において周囲との人間関係の構築はできていたことがみられた。

3) 挫折経験と両立ストレスの対処：<Q3-11,12>

<Q3-11>「挫折経験」においては E) 私立関東圏中位大学 1 グループが 80.0 と高く、A) 国立大学グループ 70.3、F) 私立関東圏中位 2 グループ 69.7、B) 私立関東圏難関大学グループ 68.6、I) A~H よりも難易度が低い大学グループ 68.4 であった。一方で、C) 私立関東圏準難関大学グループ、D) 私立関西圏難関大学グループ、G) 私立関西圏中位グループが 62 前後と回答者全体よりも低く、H) 私立関東圏理系大学グループは 56.3 と最も低かった。

<Q3-12>「両立ストレスの対処」に関しては、B) 私立関東圏難関大学グループが 65.7 と最も高く、次いで F) 私立関東圏中位 2 グループの 60.6、E) 私立関東圏中位大学 1 グループ 60.0、C) 私立関東圏準難関大学グループ 59.7 であった。一方で、「両立スト

レスの対処」に関しては、関西圏の大学 D) 私立関西圏難関大学グループ 48.5、46.8 であった。

「挫折経験と両立ストレスの対処」において、I) A~H よりも難易度が低い大学グループが 68.4 ポイントであったように、運動部活動と学業における挫折を 2/3 の回答者が学生時代に経験していた。さらに、この「挫折経験」は関東圏の大学において多くみられた。しかしながら、「両立ストレスの対処」に関して関東圏の大学では対処ができていたというポイントも高く、「挫折経験」からなんらかの対処法を見出していたことがわかる。

一方で関西圏の大学は「挫折経験」が全体以下であり、関東と比べると 10 ポイント近くの開きがあるものの、「両立ストレスの対処」はできていないこともみられる。すなわち、「挫折経験」の無さが「両立ストレスの対処」の機会の無さにも繋がっている。もしくは「挫折経験」が少なく、万事が上手く行っていたとも考えられる。

さらに、I) A~H よりも難易度が低い大学グループは「挫折経験」が高く、「両立ストレスの対処」が低いことから、「挫折」からの回復の方法が解らなかったとも言えよう。

4) 就職意識: <Q3-3,13>

回答者全体において<Q3-3>「就職優位性」が低かった。その中でも B) 私立関東圏難関大学グループは 50.0 ポイントであり、C) 私立関東圏準難関大学グループの 40.3 を 10 ポイント近く上回っていた。

<Q3-13>「選択肢の拡大」においても B) 私立関東圏難関大学グループは 62.9 ポイントでも最も高く、次いで D) 私立関西圏難関大学グループの 57.6、C) 私立関東圏準難関大学グループと E) 私立関東圏中位大学 1 グループが 57.1 であった。これらのグループは回答者全体や A) 国立大学グループを 10 ポイント近く上回っていた。

「就職意識」、すなわち運動部活動と学業の両立を前提としながらも、卒業後の姿やそのための選択肢を持つ意識があったかという回答においては、2/3 の回答者が学生時代に意識はしていたものの、具体的には運動部活動（競技）に対する優位性の方が強かった。

また、これらの「選択肢の拡大」には社会知識の習得や学習が含まれる。これらとの因果関係までは言及できないが、就職意識、特に「選択肢の拡大」には入試難易度の序列との相関がみられた。

3-3. 大会での最終成績（調査結果<表 2>）

1) 部活動と学業の両立について：<Q3-1,2,4,5,6,7,10>

特徴的なものは、B)全日本学生選手権（インカレ）出場以上の最終成績であった回答者が、6/7項目において他とは差を付けて上位2番目までのポイント（Q-1,2,4,5,6,7,10）を示していた。

また、D)世界大会出場はB)全日本学生選手権（インカレ）出場以上の最終成績であった回答者を上回るポイントが2項目（Q-4,10）、全体の上位2番目まで、ないしは近いポイントが3項目（Q-2,5,7）あり、全体では「部活動と学業の両立」ができていたと回答している。特に<Q3-4>「両立のコツ」58.8、<Q3-10>「能力の客観的分析」76.5であることは、優秀な競技者の特性が表れているとも言える。

しかしながら、あくまでも主観的な<Q3-1>「両立意識」では64.7と回答者全体のポイントをも下回っている。これはE)世界大会に出場し、4位以内の回答者で顕著にみられるものである。

全体的には、大会での最終成績が上位であるほど、「部活動と学業の両立」についての意識が高かった。さらに、<Q3-2>「部活動と学業以外の犠牲」、<Q3-4>「両立のコツ」、<Q3-5>「キャリアの明確化」、<Q3-7>「明確な目標設定」、<Q3-10>「能力の客観的分析」にみられる具体的な目標や客観的な分析、コツなどの意識が高かった。

しかしながら、E)世界大会に出場し、4位以内、すなわちメダル圏内の回答者達のポイントの低さから、3)挫折経験と両立ストレスの対処:<Q3-11,12>との関係性も考えられる。

2) 関係構築：<Q3-8,9>

出身大学別の回答者と同様に、総じてポイントは高かった。回答者のほぼ70%以上が<Q3-8>「良好な関係構築」を築けており、<Q3-9>「相談相手」がいた。そして、大会での最終成績が上位である回答者にポイントが高い傾向がみられた。しかし、ここでもE)世界大会に出場し、4位以内のメダル圏内の回答者のポイントは低く、特に半数に「相談相手」がいなかった。これも、優秀な競技者の活動特性が表れているとも言える。

3) 挫折経験と両立ストレスの対処:<Q3-11,12>

<Q3-11>「挫折経験」において、C)全日本学生選手権（インカレ）出場、上位進出した回答者が78.8ポイントと高く、次にB)全日本学生選手権（インカレ）出場76.6であった。大会での最終成績が上位であるほど「挫折経験」があったことがみられた。A)地方大会までは全体と同様である。

<Q3-12>「両立ストレスの対処」は大会での最終成績が上位であるほど対処ができていたという回答であった。世界大会出場者においてはC)全日本学生選手権（インカレ）出場、上位進出した回答者と同じ64.7ポイントであった。

「挫折経験と両立ストレスの対処」において、大会での最終成績が上位であるほど、運動部活動もしくは学業での挫折が多くなっていることがみられた。特筆すべきは D) 世界大会出場 58.8、E) 世界大会に出場し、4 位以内は 50.0 であり、挫折した経験が回答者の半分しかないことがみられた。

「両立ストレスの対処」に関しては、「挫折経験」と同様に、大会での最終成績が上位であるほどストレス対処を上手く行っている。しかし、E) 世界大会に出場し、4 位以内の回答者は 50.0 ポイントと低く。大学の運動部学生が世界大会に出場、もしくはメダルを狙う競技者の特殊性として、特別な施し（支援）の必要性が指摘される。

4) 就職意識: <Q3-3,13>

<Q3-3> 「就職優位性」のポイントは総じて低く、回答者全体で 37.7 ポイントの近似値であるため、大会での最終成績による差異はほぼ無いと言える。全体のポイントが 40 に満たないことから、2/3 の大学運動部学生は卒業後の進路より、運動部活動（競技）を優先していたこととなる。

<Q3-13> 「選択肢の拡大」において、A) 地方大会までは 46.3 ポイントであった。全体回答者の 49.8 を大きく超えるのが B) 全日本学生選手権（インカレ）出場の 59.9 であり、C) 全日本学生選手権（インカレ）出場、上位進出は 62.4、D) 世界大会出場 70.6 と、大会での最終成績が上位であるほど「卒業後の選択肢」が拡大した意識を持っていた。E) 世界大会に出場し、4 位以内は 50.0 と低かった。

「就職意識」に関する特徴は、競技成績が上位になるほど「卒業後の選択肢」が拡大した意識を持っていたが、実態として競技を優先している回答が 2/3 であり、意識と実態の乖離がみられる。

3-4. 大会での試合出場状況（調査結果<表 3>）

1) 部活動と学業の両立について：<Q3-1,2,4,5,6,7,10>

5/7 項目中、<Q3-1> 「両立意識」と<Q3-2> 「部活動と学業以外の犠牲」以外において、A) レギュラーと答えた回答者のポイントが高く、総じて B) 準レギュラー、C) サブメンバー、D) メンバーであった。特徴的なのは<Q3-2> 「部活動と学業以外の犠牲」において、A) レギュラーよりも B) 準レギュラーの方が何かを犠牲にしていたことを意識しており、C) サブメンバーになるとその意識は A) レギュラーよりも下であった。

また、<Q3-1> 「両立意識」以外の 6 項目において、E) 学生スタッフのポイントは、ほとんど試合に出場していない D) メンバーを 10 ポイント近く高い。これは、C) サブメンバーに近いポイントであり、運動部での役割意識からもたらされる帰属意識などが考えられる。

2) 関係構築：<Q3-8,9>

<Q3-8>「良好な関係構築」、<Q3-9>「相談相手」のどちらにおいても A)レギュラーと答えた回答者のポイントが高く、総じて B)準レギュラー、C)サブメンバー、D)メンバーであった。また、E)学生スタッフのポイントは、ほとんど試合に出場していない D)メンバーよりも高かった。

3) 挫折経験と両立ストレスの対処: <Q3-11,12>

<Q3-11>「挫折経験」において、最も挫折を意識したのは A)レギュラー73.5 ポイントであったが、次に挫折を意識したのは、たまたま試合に出場する C)サブメンバー68.3 であった。D)メンバー50.4、E)学生スタッフ 49.4 と他の回答者とは大きく離れていた。

<Q3-12>「両立ストレスの対処」においては A)レギュラーと答えた回答者のポイントが高く、総じて B)準レギュラー、C)サブメンバー、D)メンバー、E)学生スタッフであった。

D)メンバー、E)学生スタッフにおいて、他のグループと比較して運動部活動と学業における挫折経験のポイントが低く、両立させるための「ストレスの対処」のポイントが低かったことから、「挫折の経験」はネガティブな要素だけではないことがみられた。

4) 就職意識: <Q3-3,13>

<Q3-3>「就職優位性」において、A)レギュラーは 35.9 ポイントと運動部活動（競技）を優先していることがみられる。B)準レギュラー46.0、C)サブメンバー42.1、E)学生スタッフ 41.0 であり、ポイントの低さは気になるものの、卒業後の進路の意識を持ちながら活動を行っていたことがみられる。

<Q3-13>「選択肢の拡大」においては、A)レギュラーと答えた回答者のポイントが高く、B)準レギュラー、C)サブメンバー、D)メンバーであった。また、E)学生スタッフのポイントは、毎回試合に出場していた B)準レギュラーに近かった。「運動部活動と学業の両立」によって、卒業後の選択肢を拡げるという意識はみられた。

すなわち、A)レギュラーは卒業後の選択肢を拡げるという意識はあるものの、実態として運動部活動（競技）を優先していたことから、意識と実態との乖離がみられた。

4. 【結果と分析】大学時代の部活動によって獲得したと思われるキャリアに関するコンピテンシー

4-1. 回答者全体（調査結果<表 4><表 5>）

回答者全体の調査結果を<表 4>に示した。この結果から、回答者全体の加重平均値からマイナス 1.4 ポイントまでを抽出したものが<表 5>である。

全 220 項目において 57.7 ポイントが大学時代に獲得したと思われる結果であった。これは獲得したとする回答者が 60%ということである。

特に（3）分析・批判的視点のポイントは 69.7 ポイントと高く、運動部活動での経験がキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識に優位性として表れている。

（1）感情のコントロール・ストレス耐性、（2）自己肯定感、（4）計画性、（6）対人関係・交渉能力に関しては平均値近くであったが、（5）学習意欲、（7）レジリエンス能力、（8）財務管理能力ともに 45.5 ポイントと低かった。

自らの大学時代を振り返って現在の能力を投影していることを鑑みると、（5）学習意欲は「学業との両立」をするため、学業の目的が単位を取得することへと転化したり、（7）レジリエンス能力は「運動部以外の環境」を受容し、企業にみられる組織文化（もしくは組織社会）への適応に時間を要したり、（8）財務管理能力は主に学生アスリートとして活動することから、クラブの財務も含めたマネジメント機会が少なかったことが、キャリアに関するコンピテンシーの獲得意識に影響しているとも考えられよう。

4-2. 出身大学別（調査結果<表 4><表 5>）

<表 5>では、B) 私立関東圏難関大学グループが全ての項目においてキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識を有していた。A) 国立大学グループと F) 私立関東圏中位 2 グループも 18 ポイント、D) 私立関西圏難関大学グループも 17 ポイントであった。

A) 国立大学グループは広範囲に獲得していた。F) 私立関東圏中位 2 グループ、D) 私立関西圏難関大学グループとも（1）感情のコントロール・ストレス耐性でポイント落としている点が特徴的であるが、D) 私立関西圏難関大学グループは全体と同様に（5）学習意欲や（8）財務管理能力が課題でありながら、<表 4>で示される 9 つの設問において最高、もしくは準ずるポイントとして（2）自己肯定感、（3）分析・批判的視点、（1）感情のコントロール・ストレス耐性、（4）計画性でみられた。

一方で F) 私立関東圏中位 2 グループは 6 つの設問において最高ポイントがみられる中でも（8）財務管理能力の獲得が A) 国立大学グループを抜いて B) 私立関東圏難関大学グループとほぼ同じであった。

その他の特徴として E) 私立関東圏中位大学 1 グループは、最高、準じるポイントが 4 つの設問でみられるものの、（2）自己肯定感、（6）対人関係・交渉能力、（8）財務管理能力において最も低いポイントがみられた。さらに、n=16 とサンプル数が少ないものの H)

私立関東圏理系大学グループの(4)計画性の<Q8-8>「時間の効率化」において全体が60.6のところ81.3、2番目のB)私立関東圏難関大学グループの70.0を大きく超えている。専門領域の特性とも言えよう。

また1) A~Hよりも難易度が低い大学グループにおいて(4)計画性の<Q8-6>「計画の柔軟性」においてB)私立関東圏難関大学グループの次に高いポイントであった。

総体的にはA)国立大学グループやB)私立関東圏難関大学グループのようにバランス良くキャリアに関するコンピテンシーを獲得した意識があるグループと、コンピテンシーの獲得意識(その逆の獲得できなかった意識)に特徴がみられる。また、<表5>にみられるように(2)自己肯定感の獲得が多いグループほど広範囲にキャリアに関するコンピテンシーを獲得した意識を持っていた。しかし、これは更なる調査の必要があろう。なぜなら、自己肯定感が強い場合は全てにおいてポジティブに捉えて、客観的には獲得できていなくても獲得したと回答する可能性も有り得るからである。

4-3. 大会での最終成績(調査結果<表6><表7>)

回答者全体の調査結果を<表6>に示した。この結果から、回答者全体の加重平均値からマイナス1.4ポイントまでを抽出したものが<表7>である。

<表7>では大会での最終成績別にキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識を示した。ほぼ、B)全日本学生選手権(インカレ)出場(197)、C)全日本学生選手権(インカレ)出場、上位進出(85)、D)世界大会出場(17)までのコンピテンシーの獲得意識が高かった。

<表6>を再び確認してみると、全てのコンピテンシーの獲得意識は、ほぼA)地方大会まで(726)→B)全日本学生選手権(インカレ)出場→C)全日本学生選手権(インカレ)出場、上位進出→D)世界大会出場の順で高くなっている。若干の前後はあるものの最終成績(競技成績)と相関している。特にD)世界大会出場の回答者は14/20設問において最高ポイント、ないしは準ずるポイントであった。(3)分析・批判的視点:<Q8-5>「予測しない状況下での対策」は全体が59.3ポイントでありながら、94.1ポイントと抜きん出ており、次点のC)全日本学生選手権(インカレ)出場で上位進出が72.9であり、大きく差をつけている。世界大会出場者は海外での試合など、不測の事態への対応が常に求められている点で現代のグローバル化にも適した能力を獲得しているとも言えよう。さらに、(1)感情のコントロール・ストレス耐性:<Q8-7>「どのような状況でも感情をコントロール」に関しても、他を圧倒する82.4であり、次点のC)全日本学生選手権(インカレ)出場で上位進出の69.4を大きく離し、上述同様に現代のグローバル化にも適した能力を獲得している意識が伺える。

一方で E) 世界大会に出場し、4 位以内の回答者は総じて低かった。特に 6) 対人関係・交渉能力：<Q8-15>「関係者との良好な関係」において 33.3（全体 66.6）は突出して低く、関係者とは良好な関係を作り上げていく能力を獲得していないという意識であった。さらに（2）自己肯定感：<Q8-18>「生活スキル」において、全体が 58.9 の中で、F) その他の 50.8 より僅かではあるが低い 50.0 であった。近年において、メダルを目指すアスリートのために協会や連盟などの周囲が環境を整えることは必須条件となっている。このような競技という閉ざされた社会において「生活スキル」には触れずに運動部活動に取り組んでいたことが予見される。わが国を代表する学生アスリートであるが故に、他の学生アスリートとは異なる施しが、全てのキャリアに関するコンピテンシーの獲得に対して必要性が生まれていることがこれらの結果から示唆される。

4-4. 大会での試合出場状況（調査結果<表 8><表 9>）

回答者全体の調査結果を<表 8>に示した。この結果から、回答者全体の加重平均値からマイナス 1.4 ポイントまでを抽出したものが<表 9>である。<表 9>では大会での試合出場別にキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識を示した。

まず、全体の獲得意識が 41.7 ポイントと高くなかったことが特徴である。

（2）自己肯定感、54.2、（5）学習意欲 55.7、（7）レジリエンス能力 66.7 と比較的高かったが、（1）感情のコントロール・ストレス耐性 29.2、（3）分析・批判的視点 38.9、（4）計画性 33.3、（6）対人関係・交渉能力 38.9、（8）財務管理能力 33.3 と 2/3 の回答者がキャリアに関するコンピテンシーの獲得ができていないと認識していた。

個別の出場状況において、A)レギュラーは全ての項目において獲得意識がみられ、その次に B)準レギュラー、C)サブメンバーであった。大会での試合出場別のキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識は試合出場別による序列と相関していることがみられた。

<表 8>の詳細からみられる特徴は、殆ど試合に出ていない D)メンバー(119)と E)学生スタッフ（マネジャー・主務・学連等含む）において、18/20 の設問で E)学生スタッフの方が高いポイント、すなわち、キャリアに関するコンピテンシーの獲得意識が高かった。

これらから、大会での試合出場別のキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識は、試合出場別による序列だけでなく、大学運動部における「所属の目的」がキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識に影響を及ぼしていた。

5. まとめ及びキャリア支援の促進への若干の示唆

1. 意識と実態の乖離

学生アスリートは「運動部活動と学業との両立」を意識していないというステレオタイプな言説とは異なり、本調査による「両立の意識」は高かった。しかしながら、卒業後の進路や情報、ネットワークなどを積極的に獲得するための行動よりも、運動部活動が中心となりやすく、明確で具体的な学修や計画、行動に関する意識が低いという結果からも、意識と実態の乖離がみられた。明確で具体的な学修や計画、行動に対する支援の必要性が示唆される。

2. 競争とストレス耐性の相関

「運動部活動と学業との両立」における挫折やストレスは、概して大学の入学難易度の高低、大会最終成績における上位から下位、大会での試合出場における出場状況の順に相関して、挫折の経験やストレスを感じる回答が高かった。しかしながら、その挫折の経験やストレスを克服してきたという意識も同様の相関がみられた。すなわち、運動部活動に対する現代社会的な風潮とは異なり、ストレス耐性は運動部活動における競技や競争を中心として育まれていることも示しており、支援における環境設定の重要性が示唆される。

3. 広義な大学環境による意識差の発生

「キャリアに関するコンピテンシーの獲得意識」においても、上記2.における入学難易度と同様の傾向がみられた。しかしながら、その大学の位置づけとは異なる項目において、特に高い獲得意識や低い獲得意識がみられた。これは学術領域や地域性（関東、関西、その他の地域）などでの差異がみられ、広義な大学環境によつての意識差が発生している。これらを上下の評価にて一元的に捉えるのではなく、「個性」として捉える支援によつて、他のコンピテンシーの獲得も可能となることを示唆している。

4. 自己肯定感と他の項目の獲得意識との相関

「キャリアに関するコンピテンシーの獲得意識」において、自己肯定感と他の項目の獲得意識の高さとの相関がみられた。自らの目的や役割の認識、再確認によつて自己肯定感を醸成することが、コンピテンシーの獲得意識に関与することを示している。これは、大会での試合出場機会別の調査において、メンバーよりも学生スタッフの獲得意識が高いことから明からである。すなわち、運動部活動への関わり方として、学生アスリートのみを中心とした視点だけではなく、大学スポーツという観点から運動部活動の目的や役割の認識、再確認をすることにより、運動部活動に関わる学生の自己肯定感が醸成され、キャリアに関するコンピテンシーが高まることを示唆している。

5. 学生アスリートにみられる学生生活との乖離

「世界大会へ出場し、4位以内」の回答者の特徴として、「運動部活動と学業の両立」「キャリアに関するコンピテンシーの獲得」のどちらにも意識の低さがみられた。これは国際大会などにて世界を転戦する学生アスリートにとって、時間的にも物理的にも「運動部活動と学業の両立」には過酷な条件が課されている。また、世界のトップレベルを目標と掲げるならば、自己の到達基準値が高くなり、「キャリアに関するコンピテンシーの獲得」も意識の高さに応じた回答をしている可能性が高くなる。世界大会出場者が「不測の事態への対応」や「感情のコントロール」等の回答において非常に高い獲得意識を持っていた。「世界大会へ出場し、4位以内」の回答者において獲得意識が低くなることは、学生アスリート、もしくは一人の人間の成長として意識が高くなったことによって、獲得意識の低い回答を行った可能性は十分に考えられる。学生アスリートの競技レベルが高くなるほど、学生生活（学業含む）から乖離していく矛盾を自明とするのではなく、貴重な経験から得られたグローバルなコンピテンシーをキャリアに活かせる施しを行う必要性が示唆される。総体的な学生アスリートに対するキャリア支援だけでなく、大学スポーツをグローバルワイドな観点から見据えた段階別の支援の必要性が示唆される。

報告者

上田滋夢 UNIVAS デュアルキャリア部会（追手門学院大学社会学部）※座長
栗田佳代子 東京大学大学院教育研究科
江原謙介 UNIVAS デュアルキャリア部会（阪南大学流通学部）
萩原悟一 UNIVAS Data Library 検討部会（九州産業大学人間科学部）
松井陽子 UNIVAS デュアルキャリア部会（早稲田大学スポーツビジネス研究所）

なお、本研究を進めるにあたり、大阪大学経営企画オフィスの石川勝彦先生には、調査設計にあたり多くのご助言を頂戴しました。お礼申し上げます。

A)レギュラー(593)、B)準レギュラー(139)、C)サブメンバー(145)、D)メンバー(119)、E)学生スタッフ(マネジャー・主務・学連等含む)(83)、F)その他(29)

A) 地方大会まで(726)、B)全日本学生選手権(インカレ)出場(197)、C)全日本学生選手権(インカレ)出場、上位進出(85)、D)世界大会出場(17)、E)世界大会に出場し、4位以内(18)、F)その他

(65)

- (1) 感情のコントロール・ストレス耐性<Q8-1><Q8-4><Q8-7><Q8-11>
- (2) 自己肯定感<Q8-2><Q8-14><Q8-18><Q8-19>
- (3) 分析・批判的視点<Q8-3><Q8-5><Q8-10>
- (4) 計画性<Q8-6><Q8-8><Q8-9>
- (5) 学習意欲<Q8-12>
- (6) 対人関係・交渉能力<Q8-13><Q8-15><Q8-20>
- (7) レジリエンス能力<Q8-16>
- (8) 財務管理能力<Q8-17>

<1> 苦しい時や挫折しそうな時に忍耐強く耐えられる

<2> 自分の強み、弱みや能力が理解できる

<3> 物事に優先順位を着けることができる

<4> 気を散らすことなく、仕事に集中できる

<5> 予期しない自体が起こった時のために、事前に対策を講じられる

<6> 必要に応じて、計画を柔軟に変更することができる

<7> どのような状況でも感情をコントロールできる

<8> 自分の時間を効率的に使える

<9> 予定を前もって計画することができる

<10> 自分の仕事を批判的に評価した上で、軌道修正できる

<11> 無理をしすぎず、休んで回復に務めることの重要性が理解できている

<12> 他人の経験談や過去の経験から多くを学びたいと思える

<13> 適切なタイミングで人にアドバイスを求めることができる

<14> 自分に自信が持てているため、確信を持って行動ができる

<15> 友人・先輩・先生・その他関係者と良好な関係を維持することができる

<16> 新しい環境・状況にもうまく適応できる

<17> お金の支出管理ができる

<18> 十分な生活スキル(料理をする等)があって、自力で生活ができる

<19> 悩んだり葛藤することがあっても、自分自身で解決することができる

<20> 自分が実現したいことのために、関係者に交渉する力がある

- A) 国立大学グループ (431)
- B) 私立関東圏難関大学グループ (70)
- C) 私立関東圏準難関大学グループ (77)
- D) 私立関西圏難関大学グループ (66)
- E) 私立関東圏中位大学 1 グループ (35)
- F) 私立関東圏中位 2 グループ (66)
- G) 私立関西圏中位グループ (62)
- H) 私立関東圏理系大学グループ (16)
- I) A~H よりも難易度が低い大学グループ (225)

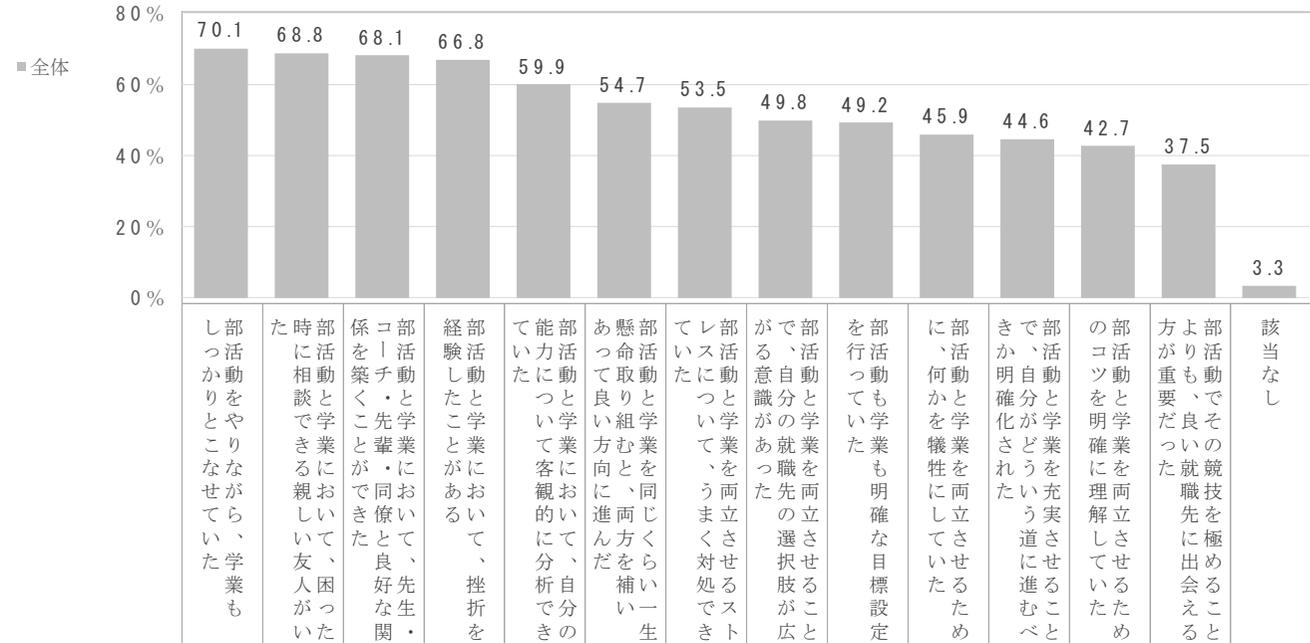
<表1>

大学時代の部活動の状況 TOP2 | 卒業大学(SC4)

対象：全体(n=1,108)

Q3.あなたは大学時代に運動系の部活動をしてきた時、どのような状況でしたか？

【MA】



n = 30 以上の場合



大学	人数	し活動をやりにあきらめた	た部に活動し、先輩・同期と交流ができた	係を築くことができた	部活動と学業に両立できた	経験活動したことがある	能力活動について客観的に分析できた	懸命活動と良い方向に進んだ	レ活動についてうまく対処できた	が、自分の就職先の選択が広	を活動も明確な目標設定	に、活動を両立させるため	き、自分がどう進みたい	の活動と学業を両立させるため	方が重要だった就職先に出る	該当なし
全体	(1108)	70.1	68.8	68.1	66.8	59.9	54.7	53.5	49.8	49.2	45.9	44.6	42.7	37.5	3.3	
国公立大学	(431)	75.9	74.0	70.8	70.3	64.5	58.7	56.8	49.4	47.1	45.2	45.0	43.6	36.9	0.9	
卒業大学	上智・早稲田・慶応クラス	(70)	78.6	75.7	74.3	68.6	64.3	61.4	65.7	62.9	68.6	52.9	54.3	60.0	50.0	1.4
	明治・青山学院・立教・中央・法政クラス	(77)	68.8	58.4	58.4	61.0	72.7	59.7	59.7	57.1	57.1	53.2	50.6	44.2	40.3	6.5
	同志社・関西学院・立命館・関西クラス	(66)	77.3	69.7	77.3	62.1	53.0	68.2	48.5	57.6	57.6	63.6	48.5	50.0	34.8	3.0
	成蹊・成城・明治学院クラス	(35)	77.1	74.3	71.4	80.0	48.6	57.1	60.0	57.1	54.3	54.3	48.6	48.6	34.3	0.0
	日大・東洋・駒沢・専修クラス	(66)	66.7	71.2	63.6	69.7	57.6	57.6	60.6	53.0	53.0	48.5	48.5	45.5	39.4	4.5
	甲南大・近畿・龍谷・京都産業クラス	(62)	64.5	67.7	69.4	61.3	66.1	51.6	46.8	46.8	45.2	48.4	41.9	37.1	35.5	1.6
	芝浦工業、東京都市・東京電機・工学院クラス	(16)	75.0	56.3	62.5	56.3	62.5	50.0	62.5	62.5	37.5	18.8	31.3	68.8	43.8	6.3
	上記よりも入試難易度が低い大学	(225)	63.6	65.3	64.0	68.4	54.7	43.6	45.8	44.9	44.0	41.3	40.9	36.4	38.2	4.0
その他	(15)	60.0	53.3	80.0	60.0	46.7	40.0	20.0	33.3	40.0	40.0	33.3	20.0	33.3	6.7	
わからない	(45)	35.6	44.4	55.6	37.8	31.1	37.8	40.0	28.9	42.2	24.4	31.1	22.2	22.2	22.2	

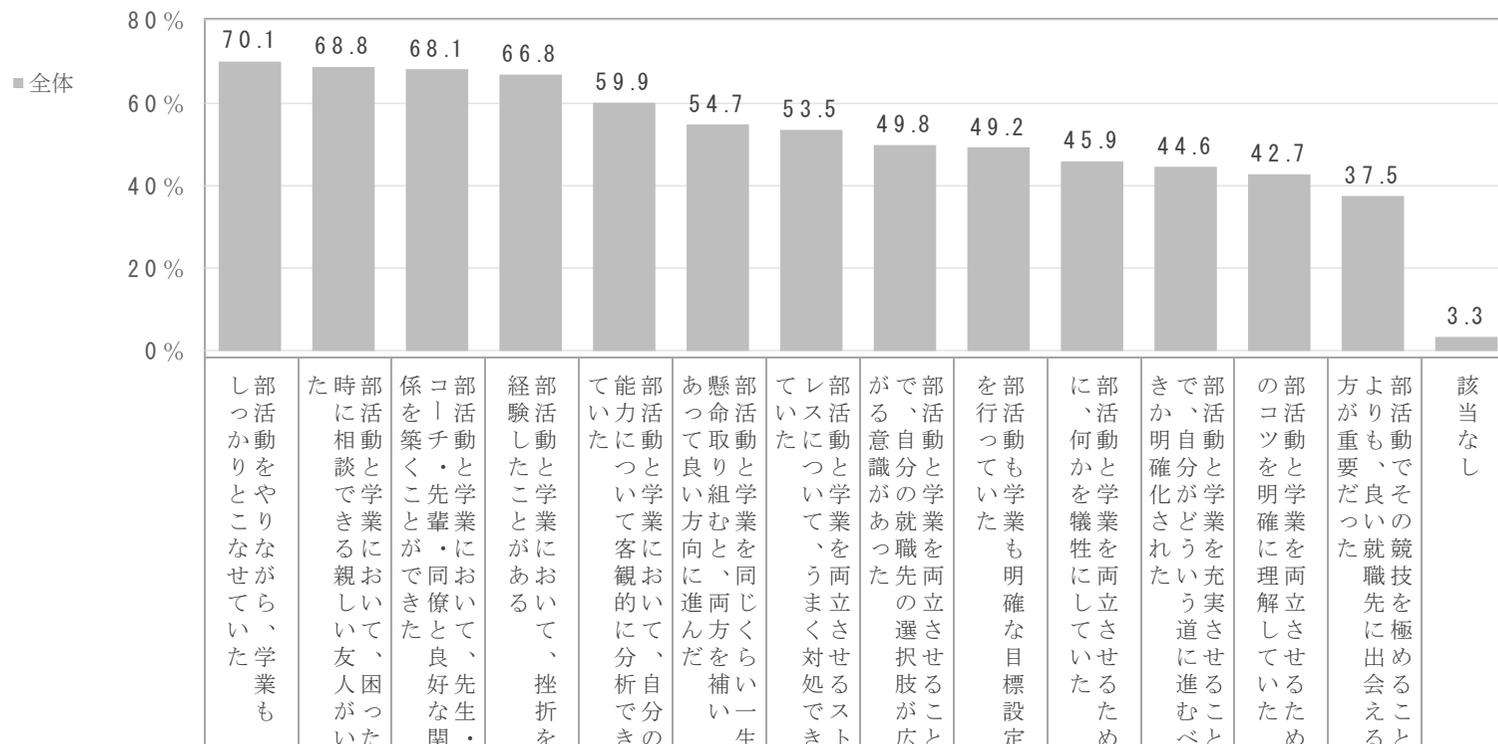
※「全体」の多い順にソート

<表2>

大学時代の部活動の状況 TOP2 | 大会での最終成績(SC7)

対象：全体(n=1,108)

Q3.あなたは大学時代に運動系の部活動をしていた時、どのような状況でしたか？



n = 30 以上の場合

[比率の差]	
全体+10ポイント	全体+5ポイント
全体-5ポイント	全体-10ポイント

大会での最終成績	人数	し部っ活かりやとこりなせていた、学業も	た時に活動と学業が両立できていた、友人がいた	係を築くことができた	部活動と学業が両立できていた、先生・先輩との関係が良かった	経験したことがある、挫折を乗り越えた	能力活動と学業が両立できていた、自分の得意分野を伸ばした	懸命に取り組む、両方をこなすのが得意だった	レスポンスが良かった、両方に対する意識があった	で行った活動も明確な目標設定があった	に、活動と学業を両立させるため、何を犠牲にしたか	きか、活動と学業を両立させるために、何を犠牲にしたか	の部活動と学業を両立させるため	方が重要だった、競技先に出ることにこだわった	該当なし
全体	(1108)	70.1	68.8	68.1	66.8	59.9	54.7	53.5	49.8	49.2	45.9	44.6	42.7	37.5	3.3
地方大会まで	(726)	69.4	67.5	67.6	64.6	57.0	55.2	50.4	46.3	47.4	41.6	40.9	39.9	38.2	3.9
全日学生選手権 (インカレ) 出場	(197)	75.6	74.6	72.1	76.6	70.6	56.9	60.9	59.9	55.8	56.9	58.9	50.8	38.6	0.5
全日学生選手権 (インカレ) 出場し、上位進出	(85)	67.1	76.5	67.1	78.8	69.4	56.5	64.7	62.4	62.4	69.4	48.2	51.8	36.5	1.2
世界大会出場	(17)	64.7	70.6	70.6	58.8	76.5	52.9	64.7	70.6	52.9	58.8	58.8	58.8	41.2	5.9
世界大会に出場し、4位以内	(18)	38.9	50.0	61.1	50.0	44.4	44.4	50.0	50.0	38.9	38.9	38.9	55.6	33.3	11.1
その他	(65)	75.4	60.0	63.1	52.3	47.7	43.1	49.2	36.9	33.8	29.2	35.4	29.2	29.2	6.2

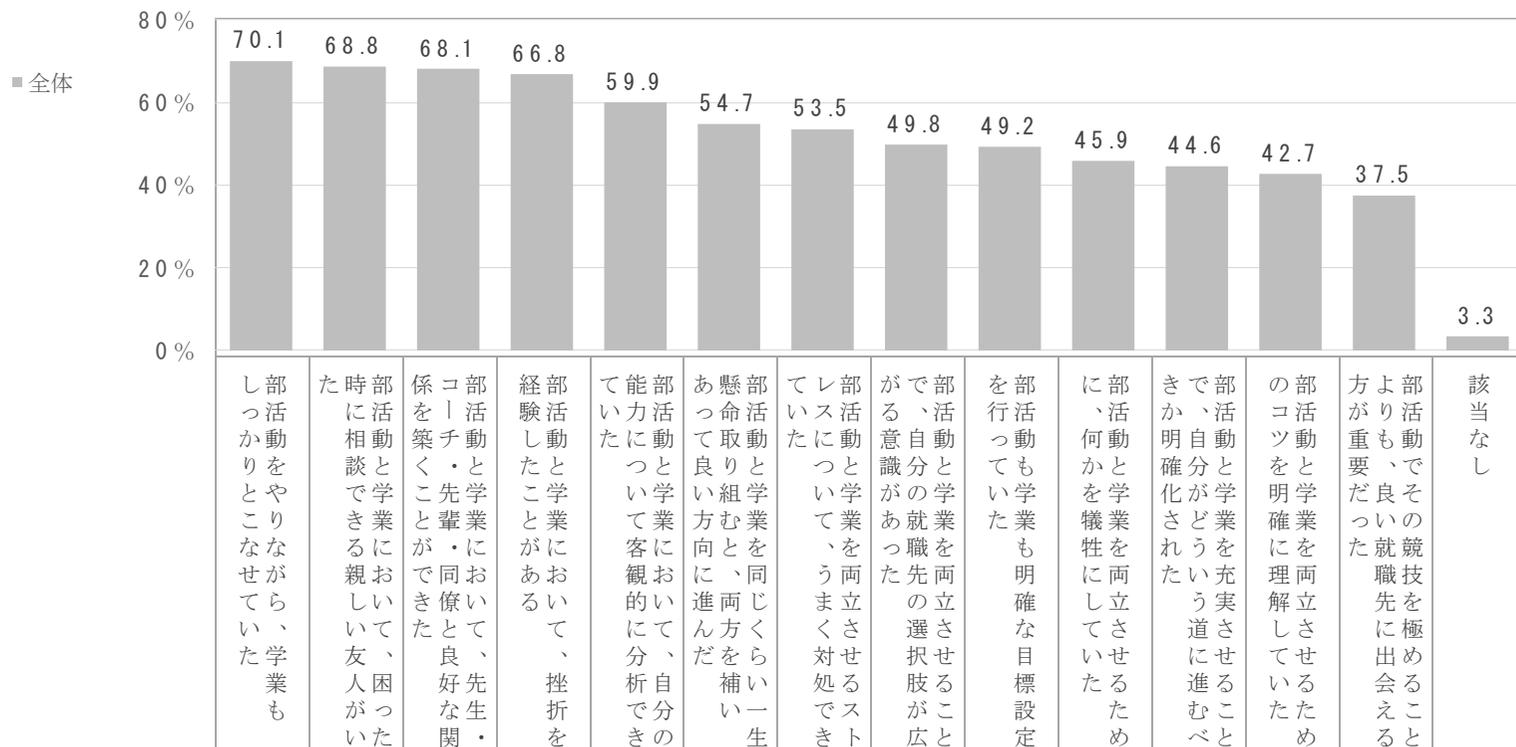
※ 「全体」の多い順にソート

<表3>

大学時代の部活動の状況 TOP2 | 大会での試合出場状況(Q2)

対象：全体(n=1,108)

Q3.あなたは大学時代に運動系の部活動をしていた時、どのような状況でしたか？



n=30以上の場合
 [比率の差]
 全体+10ポイント
 全体+5ポイント
 全体-5ポイント
 全体-10ポイント

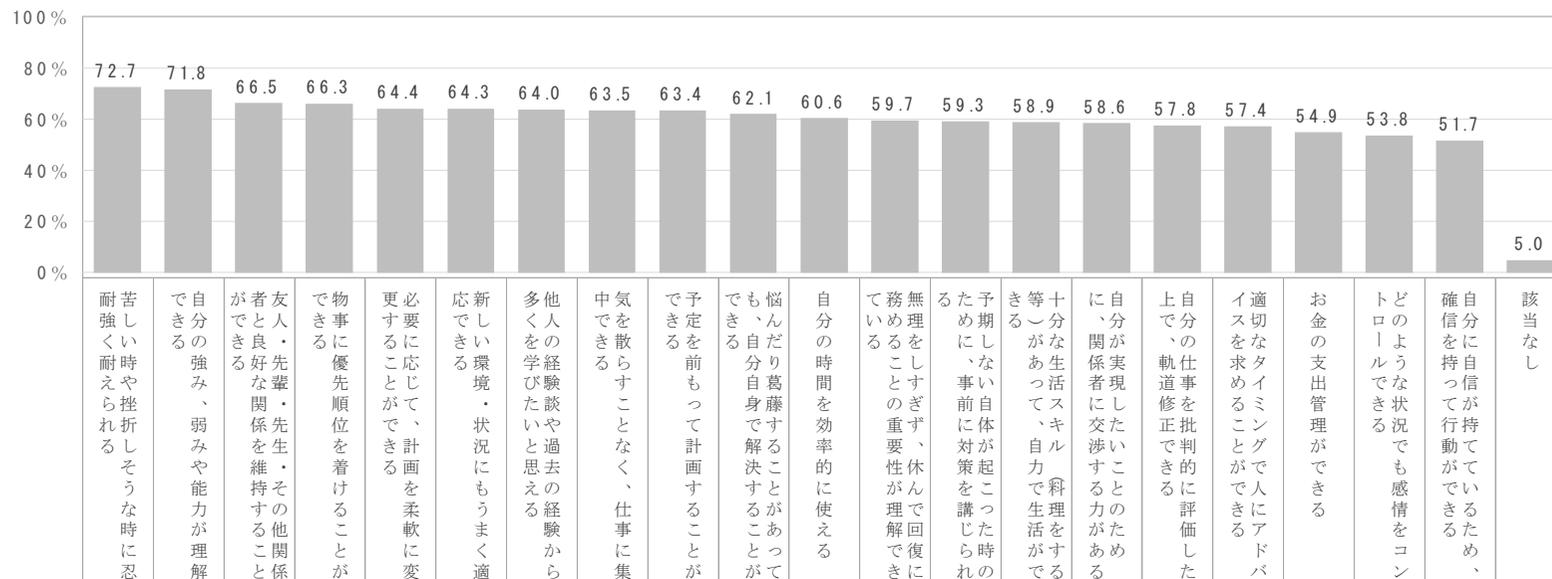
大会での試合出場状況	人数	し部っ活	た時に活動	係を築く	部活動と	経験した	て能力に	あ命活	懸活動	部活動	を部活	に部活	の部活	方が重	部活	
全体	(1108)	70.1	68.8	68.1	66.8	59.9	54.7	53.5	49.8	49.2	45.9	44.6	42.7	37.5	3.3	
大会での試合出場状況	レギュラーとして試合に出ていた	(593)	75.7	74.7	76.4	73.5	67.3	62.4	59.7	55.0	56.8	48.4	52.8	48.4	35.9	1.0
	レギュラーではないが、毎回試合に出ていた	(139)	76.3	71.2	64.7	64.0	62.6	51.8	54.0	51.1	54.0	51.1	46.8	46.0	46.0	2.9
	レギュラーではないが、たまに試合に出ていた	(145)	60.7	62.1	58.6	68.3	51.0	48.3	47.6	45.5	45.5	47.6	34.5	35.2	42.1	2.8
	ほとんど試合にはでていない	(119)	57.1	53.8	49.6	50.4	41.2	35.3	41.2	31.9	25.2	32.8	21.8	25.2	33.6	11.8
	学生スタッフだった	(83)	54.2	57.8	54.2	49.4	48.2	47.0	41.0	47.0	32.5	42.2	37.3	38.6	41.0	10.8
その他	(29)	72.4	62.1	75.9	51.7	51.7	44.8	41.4	41.4	34.5	27.6	31.0	31.0	13.8	0.0	

※ 全体]の多い順にソート

<表4> デュアル・キャリア・コンビの獲得状況 TOP2 | 卒業大学(SC4)

対象：全体(n=1,108)

Q8.あなたは現役時代を振り返って、当時、以下のことをどれくらい身につけていたと思いますか。



n = 30 以上の場合
 [比率の差]
 全体+10ポイント
 全体+5ポイント
 全体-5ポイント
 全体-10ポイント

卒業大学	人数	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0	
全体	(1108)	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0	
国公立大学	(431)	75.2	70.8	70.3	67.5	65.2	67.1	64.7	61.7	64.0	63.1	59.9	60.8	58.9	60.1	57.3	57.1	57.8	59.2	53.1	50.3	4.2	
私立大学	上智・早稲田・慶応クラス	(70)	82.9	80.0	74.3	70.0	75.7	67.1	77.1	74.3	70.0	68.6	68.6	71.4	64.3	64.3	74.3	64.3	58.6	64.3	62.9	2.9	
	明治・青山学院・立教・中央・法政クラス	(77)	66.2	70.1	62.3	59.7	61.0	59.7	62.3	62.3	63.6	62.3	63.6	59.7	55.8	53.2	63.6	59.7	62.3	54.5	57.1	61.0	7.8
	同志社・関西学院・立命館・関西クラス	(66)	72.7	83.3	68.2	71.2	63.6	66.7	57.6	74.2	62.1	65.2	69.7	57.6	60.6	62.1	68.2	60.6	68.2	51.5	62.1	63.6	3.0
	成蹊・成城・明治学院クラス	(35)	85.7	71.4	62.9	68.6	57.1	68.6	71.4	71.4	60.0	48.6	54.3	68.6	42.9	37.1	48.6	51.4	45.7	48.6	57.1	42.9	5.7
	日大・東洋・駒沢・専修クラス	(66)	72.7	75.8	68.2	69.7	63.6	65.2	71.2	62.1	66.7	72.7	59.1	65.2	65.2	66.7	66.7	60.6	60.6	59.1	50.0	57.6	4.5
	甲南大・近畿・龍谷・京都産業クラス	(62)	71.0	79.0	69.4	71.0	62.9	61.3	67.7	61.3	69.4	69.4	59.7	62.9	59.7	48.4	67.7	56.5	61.3	41.9	53.2	51.6	1.6
	芝浦工業・東京都立・東京電機・工学院クラス	(16)	62.5	81.3	56.3	50.0	62.5	62.5	56.3	62.5	43.8	56.3	81.3	56.3	62.5	68.8	56.3	68.8	56.3	50.0	56.3	68.8	0.0
	上記よりも入試難易度が低い大学	(225)	71.6	69.8	62.7	66.7	66.2	62.2	61.3	64.0	62.2	59.1	58.7	56.9	60.9	63.1	57.3	58.7	53.8	53.8	52.9	46.7	6.2
その他	(15)	66.7	60.0	73.3	53.3	46.7	73.3	60.0	60.0	66.7	40.0	53.3	46.7	60.0	53.3	46.7	40.0	40.0	46.7	33.3	53.3	13.3	
わからない	(45)	48.9	51.1	40.0	48.9	51.1	44.4	44.4	48.9	51.1	46.7	46.7	37.8	42.2	42.2	33.3	31.1	42.2	40.0	40.0	31.1	11.1	

※ [全体]の多い順にソート

<表5>出身大学別のキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識

—全体値以上で(-1.4)までを抽出—

設問番号	(1) 感情のコントロール・ストレス耐性		(2) 自己肯定感		(3) 分析・批判的視点		(4) 計画性		(5) 学習意欲		(6) 対人関係・交渉能力		(7) レジリエンス能力		(8) 財務管理能力		総計										
	1	4	7	11	小計	2	14	18	19	小計	3	5	10	小計	6	8		9	小計	12	13	15	20	小計	16	17	
A) 国立大学 (431)	1	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	1	1	18
B) 私立関東圏難関 (70)	1	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	1	3	1	20
C) 私立関東圏準難関 (77)	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	1	2	1	1	2	1	2	1	2	1	11
D) 私立関西圏難関 (66)	1	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	3	1	3	1	1	3	1	3	1	3	1	17
E) 私立関東圏中位1 (35)	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	3	0	1	1	7	
F) 私立関東圏中位2 (66)	1	1	1	1	2	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	3	1	3	1	3	1	18
G) 私立関西圏中位 (62)	1	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	3	1	3	1	14
H) 私立関東圏理系 (16)	1	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	3	1	3	1	10
I) A-Hより難易度低 (225)	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	0	1	2	1	1	0	1	1	1	1	1	10
J) その他 (15)					0				0				0				0						1				2
K) わからない (45)					0				0				0				0						0				0
獲得合計	6	7	8	4	25	6	7	6	6	25	7	8	8	23	6	7	7	20	5	7	7	7	19	5	5	5	127
全項目数	44		44		33		33		33		11		33		11		11		6		18		11		11		220
対全項目数比率(ポイント)	56.8		56.8		69.7		60.6		45.5		57.6		45.5		45.5		57.7										

<表7>大会最終成績別のキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識

—全体値以上で(-1.4)までを抽出—

設問番号	(1) 感情のコントロール・ストレス耐性		(2) 自己肯定感		(3) 分析・批判的視点		(4) 計画性		(5) 学習意欲		(6) 対人関係・交渉能力		(7) レジリエンス能力		(8) 財務管理能力		総計										
	1	4	7	11	小計	2	14	18	19	小計	3	5	10	小計	6	8		9	小計	12	13	15	20	小計	16	17	
A) 地方大会まで (726)	1	4	7	11	0	2	14	18	19	0	3	5	10	0	6	8	9	0	12	13	15	20	0	16	17	0	
B) インカレ出場 (197)	1	1	1	1	4	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	3	1	20	
C) インカレ上位進出 (85)	1	1	1	1	4	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	3	1	20	
D) 世界大会出場 (17)	1	1	1	1	4	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	2	1	2	1	1	19	
E) 世界大会4位以内 (18)					0				1				0				0						0				1
F) その他 (65)					0				0				0				0						0				0
獲得合計	3	3	3	3	12	3	4	3	3	13	3	3	3	9	3	3	3	9	3	3	2	3	3	8	3	3	60
全項目数	24		24		18		18		18		6		18		6		6		6		18		6		6		120
対全項目数比率(ポイント)	50.0		54.2		50.0		50.0		50.0		44.4		50.0		50.0		50.0										

<表9>大会出場状況別のキャリアに関するコンピテンシーの獲得意識

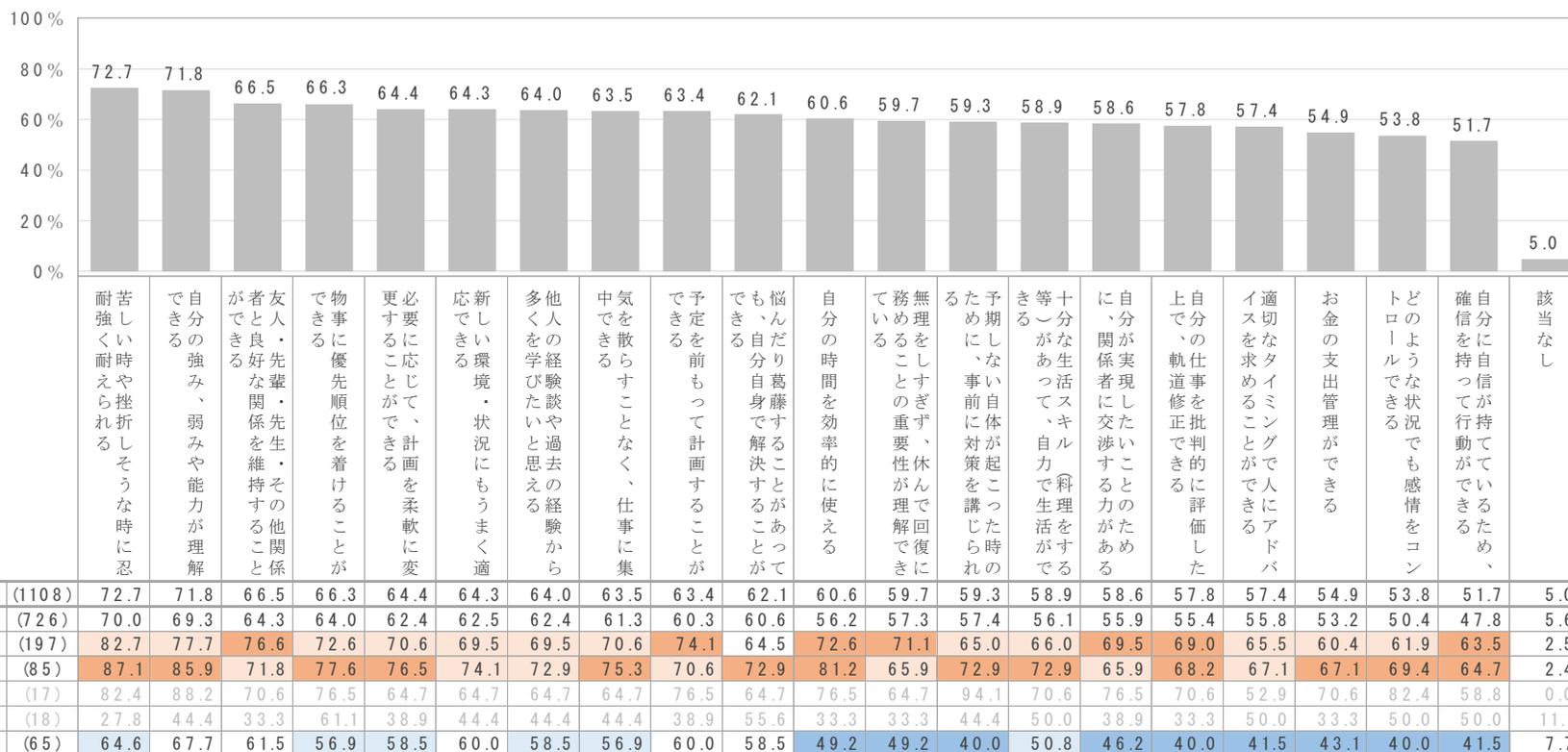
—全体値以上で(-1.4)までを抽出—

設問番号	(1) 感情のコントロール・ストレス耐性		(2) 自己肯定感		(3) 分析・批判的視点		(4) 計画性		(5) 学習意欲		(6) 対人関係・交渉能力		(7) レジリエンス能力		(8) 財務管理能力		総計										
	1	4	7	11	小計	2	14	18	19	小計	3	5	10	小計	6	8		9	小計	12	13	15	20	小計	16	17	
A) レギュラー (593)	1	1	1	1	4	1	1	1	4	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	3	1	1	20
B) 準レギュラー (139)					1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	3	1	3	1	1	13
C) サブメンバー (145)	1	1			2	1	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	10
D) メンバー (119)					0				0				0				0						0				0
E) 学生スタッフ (83)					0				0				0				0					0		0			0
F) その他 (29)					0				1				1				1					1		1			7
獲得合計	2	2	1	2	7	3	3	4	3	13	3	3	1	7	3	1	2	6	4	4	2	3	2	7	4	2	50
全項目数	24		24		18		18		18		6		18		6		6		6		18		6		6		120
対全項目数比率(ポイント)	29.2		54.2		38.9		33.3		66.7		38.9		66.7		33.3		41.7										

<表6> デュアル・キャリア・コンビの獲得状況 TOP2 | 大会での最終成績(SC7)

対象：全体(n=1,108)

Q8.あなたは現役時代を振り返って、当時、以下のことをどれくらい身につけていたと思いますか。



n = 30 以上の場合
[比率の差]
全体+10ポイント
全体+5ポイント
全体-5ポイント
全体-10ポイント

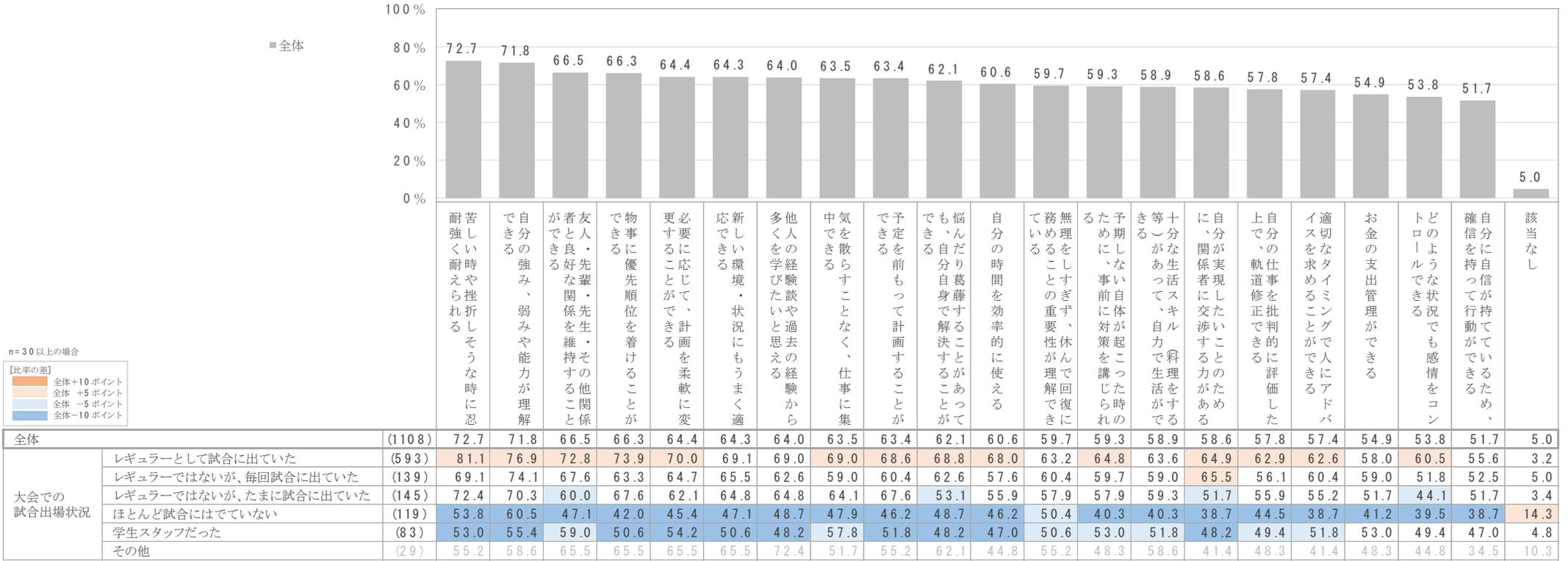
大会での最終成績	人数	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0
全体	(1108)	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0
地方大会まで	(726)	70.0	69.3	64.3	64.0	62.4	62.5	62.4	61.3	60.3	60.6	56.2	57.3	57.4	56.1	55.9	55.4	55.8	53.2	50.4	47.8	5.6
全日学生選手権 (インカレ) 出場	(197)	82.7	77.7	76.6	72.6	70.6	69.5	69.5	70.6	74.1	64.5	72.6	71.1	65.0	66.0	69.5	69.0	65.5	60.4	61.9	63.5	2.5
全日学生選手権 (インカレ) 出場し、上位進出	(85)	87.1	85.9	71.8	77.6	76.5	74.1	72.9	75.3	70.6	72.9	81.2	65.9	72.9	72.9	65.9	68.2	67.1	67.1	69.4	64.7	2.4
世界大会出場	(17)	82.4	88.2	70.6	76.5	64.7	64.7	64.7	64.7	76.5	64.7	76.5	64.7	94.1	70.6	76.5	70.6	52.9	70.6	82.4	58.8	0.0
世界大会に出場し、4位以内	(18)	27.8	44.4	33.3	61.1	38.9	44.4	44.4	44.4	38.9	55.6	33.3	33.3	44.4	50.0	38.9	33.3	50.0	33.3	50.0	50.0	11.1
その他	(65)	64.6	67.7	61.5	56.9	58.5	60.0	58.5	56.9	60.0	58.5	49.2	49.2	40.0	50.8	46.2	40.0	41.5	43.1	40.0	41.5	7.7

※「全体」の多い順にソート

<表8> デュアル・キャリア・コンビの獲得状況 TOP2 | 大会での試合出場状況

対象：全体(n=1,108)

Q8.あなたは現役時代を振り返って、当時、以下のことをどれくらい身につけていたと思いますか。



n=30以上の場合
【比率の差】
全体+10ポイント
全体+5ポイント
全体-5ポイント
全体-10ポイント

大会での試合出場状況	人数	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0
全体	(1108)	72.7	71.8	66.5	66.3	64.4	64.3	64.0	63.5	63.4	62.1	60.6	59.7	59.3	58.9	58.6	57.8	57.4	54.9	53.8	51.7	5.0
レギュラーとして試合に出ていた	(593)	81.1	76.9	72.8	73.9	70.0	69.1	69.0	69.0	68.6	68.8	68.0	63.2	64.8	63.6	64.9	62.9	62.6	58.0	60.5	55.6	3.2
レギュラーではないが、毎回試合に出ていた	(139)	69.1	74.1	67.6	63.3	64.7	65.5	62.6	59.0	60.4	62.6	57.6	60.4	59.7	59.0	65.5	56.1	60.4	59.0	51.8	52.5	5.0
レギュラーではないが、たまに試合に出ていた	(145)	72.4	70.3	60.0	67.6	62.1	64.8	64.8	64.1	67.6	53.1	55.9	57.9	57.9	59.3	51.7	55.9	55.2	51.7	44.1	51.7	3.4
ほとんど試合にはでていない	(119)	53.8	60.5	47.1	42.0	45.4	47.1	48.7	47.9	46.2	48.7	46.2	50.4	40.3	40.3	38.7	44.5	38.7	41.2	39.5	38.7	14.3
学生スタッフだった	(83)	53.0	55.4	59.0	50.6	54.2	50.6	48.2	57.8	51.8	48.2	47.0	50.6	53.0	51.8	48.2	49.4	51.8	53.0	49.4	47.0	4.8
その他	(29)	55.2	58.6	65.5	65.5	65.5	65.5	72.4	51.7	55.2	62.1	44.8	55.2	48.3	58.6	41.4	48.3	41.4	48.3	44.8	34.5	10.3

※ 全体の多い順にソート